



禁断の誘惑アパート

義母と女子大生家庭教師

芳川葵

挿絵／阿川椋

立ち読み版

KTC
KILL TIME COMMUNICATION



Contents

目次

序章	4
第一章	女子大生の淫謀 相姦へのいざない.....	21
第二章	初めての経験と義母の焦り.....	61
第三章	熟女教師と疑似相姦.....	118
第四章	トリプルティーチャー それぞれの淫戯.....	165
第五章	初めての相姦 メイドママのエッチなご奉仕.....	222
終章	266

登場人物

Characters

若宮 怜子

(わかみや れいこ)

「コトー・若宮」の家主で、名門進学校の教鞭を執る三十二歳の知的美女。五年前に健太郎の父親と再婚するも死別し、現在は健太郎と二人で暮らしている。人目を惹く美貌とグラマラスな肢体の持ち主。

西牧 理沙

(にしまき りさ) 二〇二号室住人

“思春期の性”を研究する二十三歳の大学院生。週に二回、健太郎の家庭教師をしている。真面目さと小悪魔的な魅力を兼ね備えた美人で、時に周囲を驚かせることも。

冴島 敦子

(さえじま あつこ) 三〇三号室住人

三十七歳バツイチの健太郎の担任教師。肉感的な身体つきの熟女だが、学校では色気を隠すような地味な服装をする。離れて暮らす中学三年の息子を持つ。

若宮 健太郎

(わかみや けんたろう)

ごく普通の高校二年生の少年。美しい義母を女性として意識している。



枕元にたたんで置かれていた。パジャマに健太郎が手をのばそうとした直後、思いがけない言葉が投げかけられた。

「その前に、ブラもはずちて」

「えっ、ブ、ブラジャーも!？」

視線がスカイブルーの下着に包まれた双乳に引き寄せられていく。釣り鐘状に突き出した、たわわな膨らみ。ブラジャーを外すということは、その膨らみを生で見られることを意味していた。

「そうよ。締めつけられてて、苦しいの」

鼻にかかった甘い声が、健太郎の牡の部分にくすぐってくる。

「く、苦しいって、ママ、オッパイが大きくなっちゃったんじゃないの」

（僕はなんてことを言ってるんだらう。でも、ママが酔ってるからこそ、だよな）

普通ではとても口にできない言葉も、相手が酔っ払い、記憶も曖昧なものしか残らないであろうことを見越せばこそ言えた。

「そんなことにはいわよ。だって、ママ、パパが死んじゃってから、誰にも触らせて、にやいんだから。ほりゃあ、早く、ちて」

潤んだ瞳で見つめられると、そのまま押し倒してしまいたい衝動に駆られる。その

思いを再びこらえ、健太郎はダブルベッドにあがると怜子の後ろにまわりこんだ。

（よかった。ママには恋人がいないのか。それに、父さんが死んでから、誰も見たことのないオッパイを見ることができると、僕はなんて幸せ者なんだろう）

緊張で口内が渴いてきてしまう。豊満な膨らみをしっかりと支えるための、太めのストラップと幅広ベルト。健太郎は鼻息が荒くなるのを自覚しつつ、スカイブルーの幅広ベルトにある三段ホックへと指先をのばしていった。

「ほんとに外して、いいんだよね」

「ええ、お願い。早くママのオッパイを、解放ちてちょうだい」

かすれた声で確認を取った健太郎に、義母は悩ましいほどに甘い声で促してきた。小刻みに震える指先でベルトを摘み、ホックを外していく。その瞬間、釣り鐘状に実った膨らみが、たわむようにして姿をあらわした。

「ありがとう、けんくん」

艶めかしい仕草で、怜子がストラップを肩から抜き取り、無造作に床に落とす。

（ママのオッパイ。こんなに大きいのに、全然垂れてなくって、なんて素敵なんだ）

一秒でも早く、義母の乳房を見つめたかった健太郎は、ホックを外すとすぐにベッドをおり、怜子の前へと戻っていた。初めて生で目にする豊乳は、圧倒的なポリュー

ムと美しさで、健太郎の股間を刺激してきた。甘ったるい匂いが鼻腔に届き、少年の性感に揺さぶりをかけてくる。

誇らしげに突き出した釣り鐘状の膨らみ。その頂上付近は、直径五センチほどの広がりを見せる淡いピンクの乳暈が取り囲み、その中心に小指の先ほどの大きさをした濃いピンクの乳首が載っていた。

陶然として豊乳を見つめていると、突如、怜子の身体がグラツと揺れた。そのまま後ろに倒れこんでいきそうになったのだ。

「マッ、ママ」

「うーん、胸が楽になっちゃから、寝る」

とっさに両手をのばし、義母の両肩を掴んで倒れるのを防止した健太郎に、怜子は半分閉じかけてしまった目で見つめてきた。

「でも、このまま後ろに倒れたんじゃ、脚がはみ出したままになっちゃうから、ちゃんと枕に頭を載せようよ。さあ」

美母から漂ってくる、アルコール混じりの甘ったるい体臭に頭をクラクラさせながらも、健太郎はどうか怜子を定位置に横たえることができた。

（ああ、本当に凄い！ こんなに綺麗で、いやらしい身体をしてるなんて、反則だよ）

枕に頭を載せ、目を閉じている義母を見つめ、心の中で呟く。横になっても横方向にほとんど広がることなく突き出ている乳房が、規則的に上下に動いている。

下半身方向に視線を向けると、細く括れたウエストがあり、さらに下にはスカイプルーのパンティに守られた股間が目飛びこんでくる。そして、むっちりとした太腿の半ばまでしかない黒いストッキング。

「パジャマを着せなきゃいけないのは分かっているけど、でも僕、もう、たまらないよ……。はあ、ママ、気持ちいいよ」

健太郎の右手は、パジャマズボンを突きあげてくる。ペニスにのびてしまっていた。完全勃起のイチモツを握り、軽く上下にこすりあげていく。快感の震えが背筋を走り、自然と愉悅の囁きが漏れ出てしまう。

（ママを見ながら、こんなことができるなんて……。イヤ、いまならもつと……。ママの身体に触ることだつてできるかも）

怜子の顔に視線を戻すと、目はしつかり閉じられ、軽い寝息も聞こえてきていた。「ママ……。ママ……。よし、大丈夫だな」

小さく呼びかけてみたが、反応はない。それを確かめてから、健太郎は右手をそつと義母の右乳房にのぼしていった。膨らみの側面に指が触れる。ムニユツとした感触

が、指先から伝わってきた。

（す、凄い！　こんなに、柔らかい、なんて……）

指先に少し力を加えると、その分だけ柔肉に沈みこんでいく。横になってもほとんど型崩れしていないことから、もつと張りが強いのかと思っただけに、その柔らかさは驚きであった。

「う〜ん」

控えめに乳肉側面を揉んでいると、怜子が小さなうめきを漏らした。ハツとして手を離す。しかし、起きる気配はない。すぐに規則的な呼吸へと戻っていく。

（大丈夫だ。起きてない。今日はいつも以上にお酒飲んでるみたいだし、ちよつとやそつとじゃ、きつと起きないよな。だったら、もつと……。あつ、でも、その前に）
健太郎は美母を起こささないようにそつとベッドからおりると、パジャマズボンとその下のブリーフを一緒にしてずりさげていった。

下腹部を叩きそうな勢いで強張りが飛び出してくる。亀頭は膨張した影響で多少は赤黒くなっているものの、まだまだ初々しいピンクが強かった。鈴口からは、ネットリとした粘液が滲み出し、亀頭裏の窪みを通して肉竿の裏筋に垂れ落ちていく。

「ママを見ながら、身体に触りながら、させてもらうんだ。いいでしょう、ママ」

眠っている義母に小さく囁きかけていく。当然、返事はない。怜子が起き出していないことに、ホッと胸を撫で下ろしつつ、再びベッドに戻ろうとした。直後、床に落ちていたブラジャーに目が止まった。

（ママのブラジャーだ。さつきまで、あの大きなオッパイを包んでたブラジャー）

チラッとベッドに視線を移し、たわわな膨らみを見つめた健太郎は、ブラジャーを摘みあげていった。カップ表面に施されたレースの凹凸とは対照的に、内側はふわつとしたなめらかさがある。

思わず、カップ内側に鼻を押し当ててしまった。大きく息を吸いこんでいく。すると、ほのかな汗の匂いに混じって、甘い乳臭が鼻腔粘膜の奥を刺激してきた。

（はあ、ママのオッパイの匂い、なんて甘くて美味しそうなんだろう）

天を衝くペニスが、ビクンと大きく胴震いを起こした。先走りが溢れ返るように垂れ落ち、今回は陰囊までもがうつすらと濡れてしまう。

ウツトリとした表情でカップを鼻から離れた健太郎は、今後はベルト部分に縫い付けられているタグに注目していく。するとそこには「H70」という記述があった。

（H70？ HっていうのはHカップ、っていうことだよ……。すつ、凄い！ ママのオッパイ、大きいとは思ってたけど、まさかHカップだったなんて……）

視線を再びベッドにあお向けに横たわり、規則的な寝息を立てている怜子に向けていく。視線は自然と、誇らしげに聳え立つ二つの小山に集中してしまう。稜線自体はなだらかであるものの、圧倒的な存在感を放つ乳連山。

喉が盛大に上下に動いた。直後、自分でも驚くほど大きな音が鳴り、健太郎はヒヤッとした。義母が目覚ますような大音量であるはずもないのだが、これから行おうとすることへの後ろめたさから、背筋に冷や汗が流れてしまう。

怜子に変化がないことを確かめ、健太郎は再度ダブルベッドへとあがった。右手に握ったままのブラジャーをベッドの隅に置くと、マットレスの振動で義母を起こさないよう注意しつつ、ゴージャスな肉体に近づいていく。

美母が眠る真横に移動し、ウットリとした目で完璧な美貌と肉体を誇る怜子を見下ろす。うりざね形の顔は、いまは閉じられているが、起きていれば理知的な光を放つ二重瞼の瞳と、やや高めめの鼻、そして、ふっくらとした唇で構成されていた。

「ママ、ごめんね」

健太郎は眠っている義母に小さく謝罪の言葉を述べると、そのまま顔を近づけていった。規則的な寝息を立てている朱唇に、自分の唇をそっと重ね合わせていく。

（あつ、柔らかい……。僕はいま、ママとキス、してるんだ。僕のファーストキス）

唇に感じるふつくらとした感触に、背筋が感激の震えに見舞われてしまう。

(このままずっと、ママの唇と触れていたい。でも、いまはもつとほかに……)

ずっと唇を接触させていたい思いを断ち切り、陶然とした表情で母の朱唇を解放していく。次に健太郎が目指したのは、やはり二つの巨大な乳連山だ。

「ママのオッパイ。息子の僕なら、触っても、キスしても、いいよね。僕、ママのこの大きなオッパイにずっと憧れてたんだよ」

未亡人になって以降、誰も触れていないことが判明した豊乳。健太郎は怜子の隣に添い寝をすると、その頂点に位置する濃いピンクの突起に唇を近づけていった。

「ゴクッ。……チュッ」

顔を近づけていくと、その分だけ甘く芳しい乳臭が鼻腔粘膜を刺激してくる。硬直が小刻みに小さく震え、先走り液が次々と溢れ返ってきてしまう。射精感の上昇を感じつつ、左乳房の頂上にあるポッチをしゃぶっていった。

「ふっ、うーん」

それまで規則的であった義母の寝息が乱れ、身体を少しよじるような仕草も見せてきた。ハッとして慌てて乳首を解放した健太郎は、不安そうな眼差しで怜子の次の反応を待った。

（よかった、ママ、起きたわけじゃないんだ。でも、注意しないとな）

鼓動を速めている心臓を落ち着かせるように小さく深呼吸をし、再度、左乳首に唇を近づけていった。今度はしゃぶるのではなく、唇に突起を挟みこむだけである。

（ああ、できれば思いきりチュウチュウ吸いつきたいよう。でも、そんなことしたら絶対、ママが目覚ましちゃうし……）

乳首を唇で軽く挟みこみ、小さくパクパクと動かすことしかできない現状に、もどかしさが募ってくる。しかし、舌先で觸ったり吸引すれば、義母が目覚ましてしまいかもしれない。そう考えると、身悶えるほどのもどかしさに耐えるしかなかった。

（いつか、起きているママのオッパイを、こんなふうにすることができれば……）

『高校二年生にもなつて、ほんとに健くんは甘えん坊なんだから。いいわよ、ママのオッパイでよかつたら、好きなだけ吸わせてあげる。いらつしゃい、私の可愛い坊や』
甘く囁きつつ、Hカップの豊乳を差し出してくれる怜子の姿が、鮮明に脳裏に思い描かれてくる。限界付近まで膨張しているペニス、ビクンと一際大きな震えに見舞われ、腰骨がゾワツと波立つ感覚が襲う。

（ダメだ、出ちやいそう。でもどうせなら、ママのオッパイでこいつを……）

小刻みに跳ねあがる硬直に右手を添えた健太郎は、軽く唇に挟んでいた美母の乳首

を解放し、ゆっくりと上体を起こしあげていった。

怜子の顔に再び視線を向ける。ふっくらとした朱唇が、先ほどよりも少し開き、眉間に悩ましい皺が寄っているように見えるものの、目は覚ましていないようだ。

（お願いだから、もう少しだけ、目を覚まさないでよ）

心の中で祈りつつ、健太郎は怜子の身体を挟むように膝をつき、そのまま腰を落とすにいった。右手で天を衝く強張りを押しさげながら、たわわな双乳が作り出す深い谷間にペニスを挟みこんでいく。

「うはッ、あつ、おとおお……」

その瞬間、快感のうめきが自然と漏れ出てしまった。まだまだ張りを失っていない乳肉。しかし、その柔らかさも信じられないほどだ。

（凄い！ さつき少し揉んだときも柔らかいと思ったけど、こんなに優しくチンチン挟まれちゃうなんて……）

右手で強張りを押さえつける形で、谷間に硬直を押しつけただけにもかかわらず、射精衝動が一気に迫りあがってくる。先走り液がピュッとこぼれ落ちていく。

健太郎は左手を右乳房の側面に這わせ、真ん中に寄せるようにすると、素早く右手も左乳房の側面に這わせていった。ペニスが飛び出してこないよう、たわわな双乳で

しつかりと包みこんでいく。

「ああ、ママ……」

喜悅のうめきがこぼれて落ちてしまった。見下ろすとそこには、豊満な乳房の谷間にしつかりと包みこまれたペニスの姿が、はつきりと目に飛びこんでくる。

視線を上にはズラせば、ふつくらとした朱唇を半開きにし、どことなく切なそうに眉間を寄せている怜子の寝顔があった。

（ママのオッパイに、ほんとに挟みこんでるんだ）

改めて最愛の母の豊乳にペニスを埋没させていることを実感し、背筋には背徳のさざなみが駆けあがっていく。

「ママ、したいよ。僕、本当はママと、セックスがしたいんだ」

眠っていても美しい義母の美顔を見つめつつ禁断の欲望を吐露すると、ゆっくりと腰を前後に動かしはじめた。潤滑油となるものが、先走り液しかないだけに、すべりは決してよくはない。しかし、スベスベでもつちりとした乳肌の感触は絶品であった。「おお、ママ、すっごい、気持ち、いいよ。ママのオッパイは、最高だ」

怜子を起こさないよう、囁くように感動を口にし、さらに腰の動きを速めていく。「うくッ、はっ、ああ、すっごい。ママのオッパイでこすってもらうのが、こんなに



気持ちがいいなんて、想像していた以上だ」

義母が目を覚まさぬよう気を遣いながらであるだけに、双乳に這わせた両手は憧れの乳肉を揉みこむこともできず、強張りが谷間から飛び出さない程度の圧迫を加えるしかない。それでも、完全勃起に感じる乳圧は、予想を遥かに超えるものがあつた。

柔らかくそれでいて充分な張りに満ちた双乳。ゆつくりと腰を前後させるごとに、腰骨を蕩けさせるほどの愉悦が快楽中枢に届いてきている。

(柔らかくて、温かいオッパイに挟まれてるっただけで、出ちやいそうだよ)

なめらかな乳肌の優しい温もりと、膨らみの外側に這わされた両手によって、悩ましくひしゃげている乳肉の映像が、射精感を煽り立ててくる。

「ああ、ママ、おっ、くううう……」

こらえようとしても、健太郎の口からは、喜びのうめきが漏れ出てしまっていた。
(まずいよ。もしいまママが目を覚ましたら……)

息子が眠っている母親の身体に悪戯をし、豊満な乳房にペニスを挟みこんで射精しようとしているのだ。いくら優しい怜子でも、許してもらえない限度を超えている。

(でも僕は、ママのオッパイに、出したいんだ)

チュッ、グチョッ、腰を動かしていると、小さな粘音が鼓膜に届きはじめていた。

止めどなく溢れ返る先走り液が潤滑油代わりに機能しはじめていたのだ。

類い稀な美貌を誇る三十二歳の女教師。路上ですれ違ったとたん、誰もが振り返りたくなるほどの美しさと、日本人離れしたグラマラスな肢体。健太郎にとっては、非の打ち所のない完璧な女性。そんな美女の豊乳でペニスを扱きあげているのだ。

チュプ、クチュツ、自然と腰の動きが加速してくる。卑猥なテカリを放つ亀頭が、谷間から顔を覗かせる頻度が増していた。さらには、乳淫摩擦による熱の影響か、怜子の乳肌にうつすら汗が浮かびあがってきている。その汗が、柔乳に一層の艶めかしさを与え、健太郎の興奮を盛りあげてきた。

（ヤバイ、そろそろ限界だ）

乳肉にすっぽりと包みこまれた強張り。鳩尾の下あたりの柔肌に接触していた陰囊が、キュンツツといなきながら縮こまっていく。背筋がざわめき、ブルツとした震えが総身を駆け巡った。腰が跳ねあがり、ペニスが谷間から飛び出してしまいそうになる。思わず両サイドから乳肉を力いっぱい寄せ集め、なんとか押さえこんでいく。

「ふっ、う〜ん」

怜子の眉間に寄っていた皺がさらに深くなり、悩ましく半開きになっていた朱唇からは甘いうめきがこぼれ落ちていた。

「うん、僕、理沙先生にも少しでも気持ちよくなって欲しくて、それで……」

「我慢してくれたのね。ありがとう。お陰であたしのここも、トロットロになったわ。さあ、いらっしやい。先生があなたを大人にしてあげる」

興奮に呼吸を荒らげながらも真剣な眼差しを向けてくる教え子に、理沙の胸と子宮が震えてしまった。M字開脚をしたまま、上体をゆっくりとダブルベッドに横たえていくと、健太郎に両手を広げてみせた。

「ああ、理沙先生……」

膝立ちになった健太郎が、蕩けた眼差しを淫裂に向けつつ、にじり寄ってくる。右手で肉竿を握り、下腹部に貼りつきそうな強張りを押しさげるようにしていた。

「さあ、ここよ、先生の手で健太郎くんの逞しいオチンチンを渡してちょうだい。そうすればすぐに、経験させてあげるから」

理沙は右手を股間におろすと、教え子の肉竿に指を巻きつけるようにしていった。

「うはッ、くっ、おとおお……」

「我慢よ。もう少しの我慢。ああん、あなたのこれ、とつても熱くて、硬くて、素敵よ。こんな立派なおチンチンで貫かれた、それだけでイッチャウかもしれないわ」

「せ、先生、そんなこと言われたら僕、もうッ、出ちゃい、そうだよ」

絡みつかせた指を焼くほどに熱い硬直に、理沙が悩ましい眼差しを少年に向けると、健太郎が情けない声で訴えてきた。

「嘘、本当にダメなの？ ああん、童貞くんって考えてた以上に、敏感なのかも」
「すぐだから、ねッ。もうちよつとの我慢よ、さあ、腰をゆつくりと出してきて」

教え子が必死に射精感をこらえているのが伝わってくるだけに、理沙も軽い焦りを覚えはじめていた。それでも健太郎を安心させるように囁くと、パンパンに張り詰めている亀頭の切っ先を、淫蜜を溢れさせている秘唇へと引き寄せていった。

「うはッ、せん、せい」

「うん、熱いわ。本当に、健太郎くんのオチンチン、焼けるように熱い」

ンチュツ。湿った音をともなつて、亀頭の先端がスリットに触れた瞬間、健太郎の腰がビクツツと震えた。その動きで亀頭が淫唇を撫で上げる格好となり、理沙も甘いうめきを漏らしてしまう。

背筋を疼かせる愉悅に快楽中枢を揺さぶられつつも、理沙はしつかりとペニスを肉洞の入口へと導いていった。やがて、膣口へと亀頭先端の照準を合わせていく。

「ここよ。そのまま腰を突き出してくれば、あたしの膣中に、入ってこられるわ」
「は、はい。じゃあ、いきます」

上ずった声で返事をしてきた健太郎が、グイッと腰を突き出してくる。ンヂユツとくぐもった音を立て、童貞少年のペニスで、女子大院生の蜜壺に沈みこんでいく。

「ぐはッ、しゅご、イ……。チンチンが、僕のチンチンが締めつけられて、溶けちゃいそうだよ」

「ンはっ、あッ、くうん、ああ、あなたのも凄いわよ。あんッ、健太郎くんの逞しいのが、あたしの褌を、抉ってきてるうう」

健太郎が快感に顔を歪めながら悦びの言葉を発したのと同時に、理沙も淫悦に身を焦がした喘ぎを漏らしていた。牡の本能がそうさせるのか、健太郎の腰が前後に振られはじめたのだ。

驚くほどの硬さと熱さのペニスで、肉洞が大きく押し広げられ、絡みつこうとする柔褌が削り取られていく感触に、理沙は両手でシーツをギュツと掴み、背中を弓反らせてしまった。

（ああん、高校生の男の子のオチンチンが、こんなに凄いなんて。ご無沙汰だったから、ほんとにこれだけで軽くイッチャいそうだわ）

「ああ、先生、理沙、先生……」

ペニスにまとわりつく膣壁の感触に、健太郎は白目を剥きそうになっていた。腰が自然と前後に動いてしまい、キュツキュツと締めつけてくる肉洞で硬直を扱きあげていると、それまで感じたことのない強烈な射精感が押し寄せてくる。

（これが、セックス、なんだ。僕はもう童貞じゃないんだ。想像していたよりも、ずっと気持ちがいい……）

腰を振るごとに、お椀形の乳房がふるんと弾むように揺れ動き、目からも快感が伝えられてきていた。

「あふッ、くうン、とつても上手よ、健太郎くん。あたしの膣中は、気持ちいい？」
「はい、とつても、気持ちいいです。チンチン、ほんとに溶けちゃいそうです。これがセックス、なんですね」

熱くぬかるんだ蜜壺内をペニスが往復するたびに、クチュツ、グチョツと卑猥な攪拌音が沸き立ち、硬直の内側から蕩けるような愉悦が迫りあがってきている。本当に肉洞内で、強張りが溶解されてしまうのではないかと思えるほどの気持ちよさだ。

「はあん、そうよ、これがセックスよ。でも、こんなものじゃないわよ。ほら、お留守になっっている両手で、オッパイでも太腿でも好きなどころを触ってちょうだい。そ

うすれば、もつと気持ちよくなれるわよ」

艶めかしく頬を上気させ、魅力的な朱唇から甘い吐息を漏らしつつ、理沙は悩ましく細めた瞳で健太郎の顔を真つ直ぐに見つめてきていた。さらには、スラツとした両脚を跳ねあげ、ピチピチとした内腿で腰を挟みこんできた。

「うはッ、おっ、せつ、せん、せい……」

太腿を腰に巻きつけられたことによつて、蜜壺がキュツとその締めつけを強めてくる。ペニスを襲う突然の圧力変化に、健太郎の眼窩には強烈な火花が瞬き、視界が一瞬白く塗りこめられていった。

（凄い。理沙先生のおマ○コ、さつきまでより、キュツてしてきてる。これじゃあほんとに、すぐ出ちやいそうだよ）

奥歯を噛み締め、迫りあがってくる射精感をなんとか抑えこみながら、健太郎は右手を女子大院生の乳房へとのばしていった。腰のひと突きごとに、ふるんと弾む若乳をやんわりと揉みこんでいく。

「あんッ、初めて健太郎くんのに触つてあげた日以来だけど、どう、あたしのオツパイは？ お義母さんみたいに大きくないから、気持ちよくないかしら」

「そんなこと、ないよ。先生のオツパイも大きいと思うもん。それに、ママのよりず



つと弾力があって、すつごく触り心地がいいよ」

陶然としつつ、健太郎は理沙の左胸を捏ねあげていった。柔らかさはあるものの、それ以上の張りによって指が押し返されてくる。

「いいのよ、好きにして。あたしの身体はいま、健太郎くんのモノなんだから。思う存分、楽しんでちょうだい」

「ああ、理沙先生」

（理沙先生の身体が、ぼ、僕のモノ……。このふるんふるんしているオッパイも、ピチピチの太腿も、そして、この気持ちがいい、おっ、オマ○、コ、も全部……。）

魅惑の言葉に、健太郎の脳がボンツと小さく爆発した。腰の動きが自然と速まってきた。きってしまう。

グチャツ、ズチョツ、にゅぢゅつ、淫音が大きくなり、ペニスからは絶え間ない快感が送りこまれてくる。沸騰したマグマが噴火に向けての蠢動を開始していた。

何度目とも知れない射精感が頭をもたげてきている。健太郎は肛門を引き締め、吐精を少しでも遅らせようと、右手で乳房を執拗に揉みこみ、左手を腰に巻きつく太腿へと這わせていった。スベスベとした右の外腿を愛おしげに撫でさすっていく。

「はうん、ああ、素敵よ、健太郎くん。これなら、お義母さんもきつと満足させてあ

げられるわよ」

「マッ、ママを!! 僕がママを満足させるなんて……。ゴクッ」

「キャンッ、信じられないわ。まだ、大きくなるなんて」

理沙の言葉にペニスが敏感な反応をみせてしまっていた。ビクンと胴震いを起こした硬直が、肉襞を押しやるようにさらなる膨張を遂げてしまう。

「先生、僕、もう、出ちやい、そう」

「いいのよ、出して。初めてなんだから、このままあたしの膣中に、濃いミルクをいっぱい注ぎこんでちょうだい」

「このまま、理沙先生のオマ○コに出しちゃっても、いいの?」

「そうよ。今日は大丈夫な日だから、遠慮なく出してちょうだい」

普段の快活なお姉さんの顔から、淫欲に蕩けた女の表情を晒した理沙が、下から腰を揺り動かしてきた。硬直を包みこむようにこすりあげてきていた膣襞が、キュイン、キュインとその蠢きを一層妖しくしてくる。

「おお、先生。理沙、先生!」

（なにこれ、すっごい。理沙先生のオマ○コが、一層エッチに……。はあ、信じられないよ。まさか、理沙先生のほうから腰を振って、くれる、なんてえええ。それにま

さか、オマ○コへの射精をおねだりされるなんて、ほんとに、もう……)

積極的になった女子大院生の腰の動きと、膣内射精を許可する言葉が性感をいやが上にも盛りあげてくる。腰骨が蕩けてしまいそうな気持ちよさに、健太郎は我慢の結界を解除することにした。右手で弾力豊かな膨らみを押し潰すようにしつつ、がむしやらに腰の動きを加速させ、ラストスパートをかけていく。

ぢゅぢゅ、グチュツ。ペニスが淫壺に激しく出し入れされるごとに、潰れた蜜音が絶え間なく撒き散らされ、痺れるような快感が背筋を駆けあがりつづける。

「あつ、はうん、ああ、ケン、太郎、くん。ああん、ダメ、そんな激しく突かれたら、くう、久しぶりなの、エッチするの。だから、あ、あたしも、イッチャうよう」

「イッて、先生。僕と一緒に、ああ、理沙、先生、僕、本当にもう、出すよ、先生のオマ○コの奥に、僕ううう」

理沙の艶めかしいセリフが、健太郎の燃えさかる快感にさらなる油を注ぎこんでくる。眼窩ではピンクの火花がバチバチと大きな瞬きを起こし、陰嚢内を暴れまわっていたマグマが、噴火口を指して一気に上昇を開始してきた。

「いいわ、来て。健太郎くんのコッテリ濃厚ザーメン、先生の子宮にいっぱい出して」
「ああ、先生、せん、せいっ、くはッ、出るッ。僕、出ちゃう、あつ、ああああッ！」

その瞬間は実に呆気なく訪れた。ビクンと一際大きくペニスが跳ねあがった直後、破裂寸前の風船のようにパンパンに張り詰めていた亀頭がさらに膨張し、刹那、一気に駆けあがってきた白濁液が迸り出たのである。

ドピユツ、ズピヤツ、ドクン、どびゅびゅ、ドク、ドク、ずっぴゅん……。

「はうん、分かるわ、健太郎くんの熱いのが、あたしの子宮に……。ああん、ダメよ、あつ、あたしも、ツチャウ、はあ、ツクン、イツぐうう〜ンッ！」

「うほッ、締まる。先生のアそこが、グツ、ああ、僕もまだ、おお、搾られるううう」
健太郎の精液が子宮を叩く感触に、どうやら理沙も絶頂に達したようであった。蜜壺の入口がキュツと締めつけを強め、肉洞全体も収縮したように動くと、射精途上のペニスに絡みつく柔褌が一層強く強張りを抜きあげてきた。

睾丸がいなき、さらなるマグマを供給してしまう。そのため、射精の脈動はその後、十回以上もつづいて、ようやく治まったのであった。

「はあ、ああん、ほんとに、すごいっ。こんなにいっぱい、中に出されたの、あたし、初めてよ。どう、初めてのセックスは、気持ちよかった？」

「はあ、はい、最高、でした。こんなに気持ちがいいなんて、思ってたなかったから。ああ、ありがとう、先生」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

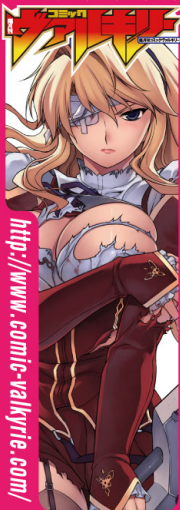
©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! 19日発売!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのパックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のお愉快的Blogも更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・cranberryをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!